Tohto University

Study of the Understanding by Public Health Nurse Students of People Requiring Care During Home Visits – Analysis on Utilization of Community Resources –

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中島, 富志子, 市原, 千里, 永井, 健太, 平塚, 久美子, 照沼, 正子, NAKAJIMA, Toshiko, ICHIHARA, Chisato, NAGAI, Kenta, HIRATSUKA, Kumiko, TERUNUMA, Masako メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.50818/00000018

© 東都大学 2018

【研究報告】

保健師学生の家庭訪問体験における対象理解に関する研究
～社会資源の活用に関わる分析～

Study of the Understanding by Public Health Nurse Students of People Requiring Care During Home Visits
– Analysis on Utilization of Community Resources –

中島　富志子　　市原　千里　　永井　健太　　平塚　久美子　　照沼　正子
Toshiko NAKAJIMA　Chisato ICHIHARA　Kenta NAGAI
Kumiko HIRATSUKA　Masako TERUNUMA

要　旨

公衆衛生看護学実習の家庭訪問体験で，対象理解の過程において，保健師学生の「社会資源の活用」の捉え方を明らかにすることを目的とした．学生７名を対象に，訪問前，訪問時，訪問後の区分で半構造化インタビューを実施しその変化や傾向を分析した．その結果，訪問前は，対象者が利用しているサービスの内容や回数などの表面上の捉え方に留まっていたが，訪問時には，社会資源の活用状況をふまえ地域のエンパワーメントや開発の視点を捉えた．訪問後は，保健師は適切な時期に情報提供する必要性や，導入時の支援の重要性を認識し，対象者や家族にとっての活用の意味を考え，視野の拡大につながっていた．保健師の助言により，学生が捉えた点と点が線でつながり対象理解に有効であったと考える．人々の暮らしを支える社会資源への認識を高めて，活用や開発の意義についてより理解を深めていけるよう教育方法を検討する必要があることが示唆された．

キーワード：保健師学生，社会資源，家庭訪問，対象理解

Ⅰ．はじめに

地域の保健活動における保健師の役割は，地域全体の健康レベルの向上に向けた関わり，個別支援による関わりの大きく二つに区分される．個別支援としての保健師の家庭訪問は，健康問題をもつ人々の生活している場（自宅）を訪問し，家族を単位としてケアや疾病予防活動，健康増進活動を行うことである[1]．保健師が行う家庭訪問には，母子保健法，精神保健福祉法，児童福祉法等の法的な根拠はあるが，一方で，その根拠にかかわらず，健康問題を抱える人々への支援など保健師の判断にて家庭訪問をすることができる．また，個別支援から，地域全体の問題として捉え，健康課題を明らかにすることで，地域の健康政策につなげていくことが可能である．

個人の生活空間である家庭を訪問し，経済状態，家族の人間関係などの家庭環境，日常生活の実態に加えて，その人の生き方や歴史までも理解できることが家庭訪問の特性である[2]．対象者だけではなく家族全体が対象となる家庭訪問は，日常の生活の場に出向き，多くの情報からアセスメントすることで事例の全体像が捉えやすくなり，対象者がより生活しやすくなるような支援の方向性が明確になる．事例のニーズや優先順位に添った支援を行うためには，全体像を把握するための対象理解を深めることが重要である．

本学では，平成 27 年度の公衆衛生看護学実習として，保健師課程４年次学生 24 名が，保健所６日間，市町村保健センター５日間の実習を行い，全員が家庭訪問を体験している．家庭訪問実習の目的は，「人々が生活する地域で，住民らの健康を守る保健活動が，どのような場所で，どのように実践されているか，観察し理解を深める．」と位置づけられており，学生は実習先の保健師との同行訪問を体験している．平成 27 年度の実習における家庭

東都医療大学 ヒューマンケア学部 看護学科
E-mail : toshiko.nakajima@tohto.ac.jp

訪問の件数は，延べ66件，学生ひとり当たりの件数は1例～3例であり，訪問した事例は表1で示すとおりである．学生が訪問を体験した後の家庭訪問記録は，事例の概要，訪問計画・実施，対象者の反応，社会資源の活用，訪問の評価，次回の訪問計画，今後必要とされる社会資源について記載し整理している．訪問後の学生のカンファレンスからは，現在直面している不安や問題，表面に見える生活状況については情報が得られていたが，生育歴，対象者の思い，家族との関係性，社会資源の活用などの情報の把握には弱く，対象者や家族の生活状況などから観察したことと，健康問題との関連付けやアセスメントを統合して対象者を理解することが比較的困難な様子が伺えた．訪問した事例の中で，多問題を抱えている場合や経過が長いことなどが，対象理解を困難にした要因として考えられる．訪問後に実習指導者から対象者の理解が浅いと指摘を受けた学生もあった．これらのことから，家庭訪問において，学生が訪問した対象者及び家族など事例をどのように捉えて理解しているのか疑問が生じた．

学生の家庭訪問の学びに関する先行研究では，学生の記録から内容と傾向を分析した結果から，「保健指導」の学びが一番多く全体の4割，次に「対象理解」が約2割を占めていた．「対象理解」の内訳は，「対象者の疾病の理解」「対象者の心理的側面」「対象者に影響を及ぼす環境」などがあった．「訪問前の準備」「社会資源」などは学びが少ない傾向にあり，学生の訪問指導技術を高めるためには，実習中に実習指導者と連携し意図的に学びが深められるように指導していく必要性[3]を報告している．また，家庭訪問を体験から得た学生の学びの記述を分析した研究では，学生が，対象者の生活実態や生活環境が把握できる生活の場に身を置き，保健師の対象者への援助過程を見聞きできる機会である訪問実習からは，訪問でのアセスメントや具体的な支援方法は得ていたが，学生自らが体験しないと学ぶことが難しい「訪問計画の立案」などは学びが少ない傾向にあり，指導方法の工夫や実習施設側と協議が必要である[4]と報告している．先行研究[3][4][5]では，実習方法や教育方法の研究はされているが，家庭訪問の対象理解に関わる具体的内容の分析についての報告は少ない．家庭訪問における対象理解は，全体像を捉えるために有効であると考えられる．そのため，家族を単位とした活動である家庭訪問では，どのような過程で対象理解を深めるかが重要である．学生の家庭訪問実習を，訪問前，訪問時，訪問後と区分し，各過程への取り組みをその変化や傾向を把握し分析することで，今後，学生への家庭訪問における対象理解への教育的意義があると考える．

本研究は，学生の家庭訪問への取り組みを訪問前，訪問時，訪問後と区分し，その変化や傾向を把握し分析することで，事例に対して学生が対象を理解するための「社会資源の活用」の捉え方を明らかにし，今後の実習指導に生かしていくことを目的とする．

用語の定義

- 対象理解：今後のケアや支援の方向性を導くための，対象者の疾病状況，心身の状態，生活状況，家庭環境，家族状況，経済状況，地域の環境，社会資源，対象者及び家族の価値観や考え方，暮らしぶりなどをアセスメントした内容とする．
- 事例の全体像：家庭訪問によって直接本人や家族から得た情報に，保健師が観察した本人や家族状況，生活状況や環境状況等の情報を統合した対象者及び家族の健康問題とその対処能力を判断したこと[2]とする．
- 取り組み：学生が対象理解のために実施したことであり，情報収集，学習，考えたこと，行動，保健師からの助言，また助言から考えたことや行動したこととする．

表1　家庭訪問実習の対象種別施設別件数

（N＝24　複数訪問あり）

	保健所実習	市町村実習	件数
母子保健	4	8	12
精神保健	10	3	13
結核	26	0	26
難病	4	0	4
障がい者	0	1	1
成人	0	3	3
高齢者	0	7	7
件数	44	22	66

Ⅱ．方法

１．対象

本学の公衆衛生看護学実習において，平成 27 年 5 月～ 9 月までに家庭訪問実習を終了した保健師課程 4 年次学生 24 名の中で，同意の得られた 7 名を対象とした．

２．調査期間と場所

平成 28 年 3 月 1 日～ 3 月 31 日までの調査期間であり，A 大学内の教室（個室）で実施した．

３．調査方法とデータ収集

半構造化インタビューに基づく質的記述的研究方法を用いた．対象者 1 名につき，60 分程度のインタビューを実施し，面接の内容は IC レコーダーに録音し逐語録を作成した．

４．調査内容

保健師課程 4 年次学生が公衆衛生看護学実習における家庭訪問で，事例の対象理解をどのように行ったのか，その過程の取り組みを明らかにするため，聴取した内容は，「事例の概要」「対象理解のために学生が訪問前に取り組んだこと」「対象理解のために学生が訪問時に取り組んだこと」「対象理解のために訪問後に取り組んだこと」について捉えた情報を，訪問前，訪問時，訪問後の経過に沿ってインタビューをした．

５．データ分析

逐語録から，学生の家庭訪問の取り組みで捉えた情報について，事例の対象理解につながる項目を意味の読み取れる単位で文脈から抽出した．抽出文脈から行為の意図に着目しコード化した．各コードは共通した意味内容で分類し，サブカテゴリ―化，カテゴリー化し，抽象的なレベルで名称をつけた．記述内容の分析は，内容の整合性を図るため研究者間での一致を確認した．

６．倫理的配慮

本研究は，東都医療大学倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号 :H2708）

倫理的配慮として，以下のことを配慮した．

1）研究対象者を一同に集め，研究説明書により研究の概要及び倫理的配慮について書面及び口頭で説明し協力を得た．
2）研究協力の是非については，署名した同意書の回収をもって同意と判断した．研究の実施に同意した場合であっても随時これを撤回できる．研究の実施に同意しないこと又は同意を撤回することによって研究対象者が不利益な扱いを受けないこととした．
3）個人情報等の管理保護については，研究参加への匿名性の保護を図った．研究協力者の研究への参加及び不参加の情報は，研究者のみが把握するものとし情報は外部には漏らさない．
4）インタビューは，プライバシーの保てる個室にて実施し，インタビューの内容については，研究対象者の承諾を得て録音した．録音及びその逐語録は匿名化し個人が特定できないようにした．
5）データは，研究室内の施錠したロッカーに保管し，データは本研究のみに使用し研究終了後，5 年間の保存後はすみやかに処分する．

Ⅲ．結果

研究対象者の学生 7 名は，全員女子学生であった．インタビューの時間は,50 分～ 70 分であった．学生のインタビューの内容から，訪問前は ,59 のコードから【対象者の特性】【家族の特性】【訪問の必要性】【社会資源の利用】の 4 つのカテゴリーに分類できた．訪問時は ,75 のコードから【生活環境】【療養生活】【対象者の思い】【家族のケア】【訪問の意義】【社会資源の活用状況】の 6 つのカテゴリーに分類できた．訪問後は，41 のコードから【療養生活】【対象者の思い】【家族へのケア】【訪問の意義】【社会資源の活用の広がり】の 5 つのカテゴリーに分類できた．なお本中の【　】をカテゴリー，《　》をサブカテゴリー，「　」はコードを示す．

１．社会資源に関する訪問前の記述

訪問前において抽出されたカテゴリー【社会資源の利用】は，《サービスの内容や回数を把握した》《社会資源を理解しようとした》の 2 つのサブカテゴリーに分類された．《サービスの内容や回数を把握した》には，「記録から介護サービスの内容やサービス回数を把握した」「記録から疾病の公費負担を把握した」「記録から保健所と他の関係機関との調整について把握した」の 3 つのコードで構成されていた．《社会資源を理解しようとした》には，「フォーマル，インフォーマルなサービスの視点はあった」「保健師から社会資源についての確認をされた」「疾病における保健所保健師の役割を確認した」の 3 つ

のコードで構成されていた．学生は，訪問前には記録を通して現在本人が利用している介護サービスの内容や使用しているサービスの回数，疾病の公費負担制度など，社会資源の活用の視点を持っていた．さらに，保健師から促されて社会資源について確認をした学生もいた．

2．社会資源に関する訪問時の記述

訪問時において抽出されたカテゴリー【社会資源の活用状況】は，《社会資源の利用の可能性を考えた》《インフォーマルな社会資源の活用を考えた》の２つのサブカテゴリーに分類された．《社会資源の利用の可能性を考えた》には，「現在利用している介護サービスを把握した」「訪問時ケアマネジャーとの関係性を見て良好だと思った」「送迎のある高齢者サロンがもっとあるといいと思った」「対象者が自分から活用してみようと思う気持ちを持ってもらうことが重要だと思った」の４つのコードで構成されていた．《インフォーマルな社会資源の活用を考えた》は，「地域の支えは公的よりも身近な近所付き合いだと思った」「授業で学んだ地域のエンパワーメントについての活用を考えた」の２つのコードから成っていた．学生は，訪問中には，訪問している対象者が利用しているサービスや，それに関わる専門職であるケアマネジャーとの関係性に目を向けていた．また，対象者にとって必要なサービスや対象者が納得したサービス利用，身近な近所付き合いの重要性などのインフォーマルなサービスも社会資源の活用として捉えており，地域でエンパワーメントされていることに気づいた．

3．社会資源に関する訪問後の記述

訪問後において抽出されたカテゴリー【社会資源の活用の広がり】は，《社会資源の情報を把握しておく重要性に気づいた》《社会資源の導入時の支援の重要性に気づいた》《家族の負担軽減のための社会資源を把握した》《社会資源の広がりを考えた》の４つのサブカテゴリーに分類された．《社会資源の情報を把握している重要性に気づいた》には，「今後必要な社会資源について保健師に聞いてみた」「保健師は社会資源を把握しておく必要があると思った」の２つのコードで構成されていた．《社会資源の導入時の支援の重要性に気づいた》には「社会資源は対象者の受け入れが重要だと思った」「保健師から社会資源は対象者に押し付けにならないように助言を受けた」「保健師は社会資源を的確な時期に対象者へ伝える必要があると思った」の３つのコードで構成されていた．《家族の負担軽減のための社会資源を把握した》には，「家族の介護負担を軽減するための社会資源を考えた」「保健師は難病の自主グループの情報を伝えていた」の２つのコードで構成されていた．《社会資源の広がりを考えた》には，「インフォーマルの関わりを保健師へ確認した」「一般（民間の業者）の人の支援が保健師への橋渡しになっていた」「理学療法士やケアマネジャーなど他職種と保健師との連携が可能だと思った」「他領域の看護学実習で学んだ社会資源が活用できないか考えた」の４つのコードで構成されていた．訪問後に学生は，保健師は必要に応じて社会資源の情報が対象者や家族に提供できるように情報を把握しておくことの重要性に気づいた．また適切な時期に情報提供を行い，対象者に押

表２　家庭訪問前，訪問時，訪問後に社会資源について学生が捉えたこと

	カテゴリー	サブカテゴリー	コード
訪問前	社会資源の利用	サービスの内容や回数を把握した	記録から介護サービスの内容やサービス回数を把握した
			記録から疾病の公費負担を把握した
			記録から保健所と他の関係機関との調整について把握した
		社会資源を理解しようとした	フォーマル，インフォーマルなサービスの視点はあった
			保健師から社会資源についての確認を促された
			疾病における保健所保健師の役割を確認した
訪問時	社会資源の活用状況	社会資源の利用の可能性を考えた	現在利用している介護サービスを把握した
			訪問時のケアマネジャーとの関係性を見て良好だと思った
			送迎のある高齢者サロンがもっとあるといいと思った
			対象者が自分から活用してみようと思う気持ちを持ってもらうことが重要だと思った
		インフォーマルな社会資源の活用を考えた	地域の支えは、公的よりも身近な近所付き合いだと思った
			授業で学んだ地域のエンパワーメントについての活用を考えた
訪問後	社会資源の活用の広がり	社会資源の情報を把握しておく重要性に気づいた	今後活用可能な社会資源について保健師に聞いてみた
			保健師は社会資源を把握しておく必要があると思った
		社会資源の導入時の支援の重要性に気づいた	社会資源は対象者の受け入れが重要だと思った
			保健師から社会資源は対象者に押し付けにならないように助言を受けた
			保健師は社会資源を的確な時期に対象者へ伝える必要があると思った
		家族の負担軽減のための社会資源を把握した	家族の介護負担を軽減するための社会資源を考えた
			保健師は難病の自主グループに参加していた
		社会資源の広がりを考えた	インフォーマルな関わりを保健師へ確認した
			一般（民間の業者等）の人の支援が保健師への橋渡しになっていた
			理学療法士やケアマネジャーなど他職種と保健師との連携が可能だと思った
			他領域で学んだ社会資源が活用できないか考えた

し付けにならないように，そして受け入れてもらえるように社会資源の導入時の支援が重要であることに気づいた．また，社会資源の活用が対象者だけでなく家族の負担軽減につながることに気づいた．さらに，公的なサービスだけでなく，インフォーマルなサービスや他職種との連携，他領域の看護学実習で学んだ社会資源の利用などを捉えていた．

Ⅳ．考察

１．学生の「社会資源の活用」に着目した対象理解の過程

社会資源とは，「生活上の諸欲求の充足や問題解決を目的として利用できる各種の制度・機関・団体および人々の知識・技術などの物的人的諸要素を総称」したものである[5) 6)]．地域にはさまざまな社会資源があり，行政機関などの公的サービスであるフォーマルなサービスと，民間業者等のインフォーマルなサービスがある．フォーマルなサービスには人的資源としての保健医療福祉の専門職，物的資源としては社会保障，制度に位置づけられた機関や施設等がある．インフォーマルなサービスは，近隣住民，愛育班などの健康づくりの地区組織，民間の組織や団体，企業などがあり，これらは地域の社会資源となっている．

古田らは，学生の家庭訪問で得た学びの内容と傾向から，「社会資源」については学びが少ない傾向にあり，教員と指導者が連携して意図的に学びが深められる指導の必要性[3)]を示唆している．また，金山らの，家庭訪問実習からの学びの分析から，専門職としての正しい知識の提供，関連する保健サービスの紹介や地域の社会資源の活用など，地域と結びつける役割への学びは少なく，他職種や他機関との連携や関係機関とのコーディネート機能に関する記述はまったくなかったことから，現状に終始してしまい予測性という視点に至っていない[5)]と指摘している．これらのことから，学生が対象理解する上で「社会資源」への捉え方は困難であると言える．訪問における情報収集では，多くの情報をただ単に収集するだけではなく，療養者とその家族の支援に必要となる情報を，優先順位を考えながら収集することが鍵[7)]となり，今回，学生は，訪問前に記録から対象者が現在利用している介護サービスの内容や回数を把握した．フォーマル，インフォーマルへのサービスの視点はあるものの，記録等からは表面上の捉え方に留まっていた．さらに学生は，保健師から社会資源の確認を促されたことで，意識して社会資源を捉えることができたと考える．訪問前に，その地域の社会資源について確認をしている学生はおらず，その視点はなかった．対象理解のための情報収集の一つとして「社会資源の活用」は必要であるが，学生の情報収集の優先度としては，高くはないのではないかと考えられる．「社会資源」は，対象を理解するための重要項目として位置づけることが重要であるといえる．

訪問時に学生は，対象者が利用している介護サービスを把握したり，保健師が対象者や家族と関わる中で観察したところから，ケアマネジャーとの関係性について気づいたり，社会資源を捉えていた．家庭訪問は，地域に出向き，その家庭での生活状況を直接見聞き，感じ取ることができる．訪問時に，ケアマネジャーなどの他の専門職に出会えたことで家族との関係性が捉えられた．さらに，訪問時，対象者や家族と関わる中で，地域で必要な高齢者サロンなどの介護サービスやインフォーマルなサービスの利用，近所付き合いの重要性について考えており，地域のエンパワーメントの捉え方につながった．学生は，訪問し対象者を直接観察したことで社会資源の活用の可能性を考えることができた．また，訪問し対象者の身体状況を確認したことで，閉じこもりを防止できる高齢者のサロン等，高齢者が集まる事業へ参加が可能となるような送迎サービス等の社会資源の開発の視点を持つことができた．「看護の実践過程において看護者が看護の対象を理解し，その人らしい生活を送ることができるよう援助するためには，住み慣れた生活環境や培われた風習，文化や健康に対する価値観，家族や近隣の人々などに視野を拡げた多面的な情報が必要である」（日本看護協会保健師職能委員会，2011）と報告している．対象理解のための多面的な情報を捉えるためのひとつとして，社会資源への視点が必要である．訪問前に必要な情報として捉えた表面上の情報に加えて，地域に出向くことでその地域の匂い，風土など地域の特性を把握し，さらに対象者が住む生活環境，近隣住民の人々，実際対象者や家族に出会い関わることで，その思いを重要視し，多面的に社会資源を捉えることができていた．地域に出ることで，その地域特有の社会資源に気づくことも考えられる．

必要な社会資源の情報提供とその活用として，「療養者や家族の状態，生活背景を踏まえ，利用可能な社会資源についての提案や情報提供をし，必要な社会資源と結びつける．看護職は，社会資源の活用の提案はできるが，最終的にその利用について決定をするのは療養者とその家族である」[7)]と言っており，このことから，社会資源の情報提供をするためには，さまざまな社会資源を把握して

おく必要があり，地域の社会資源については，その地域が持っている社会資源，さらにどうしたら活用できるのか把握しておくことが重要である．訪問後学生は，保健師が対象者や家族に提供できるように事前に社会資源を把握していく重要性と，適切な時期に情報提供を行うことや社会資源の導入時の支援の重要性に気づいた．また，対象者及び家族が意思決定するまでは，保健師の関わりが影響を及ぼすことが考えられる．学生は，対象者や家族の思いに気付き，対象者だけではなく，その家族の負担軽減のための社会資源や，公的なサービスだけでなく，インフォーマルなサービスや他職種との連携など，対象者やその家族にとって社会資源の活用の広がりを考えており，訪問した状況を踏まえ視野の拡大につながっていた．また，家族を支えるための視点が重要であり，対象者を支える家族の健康管理の重要性が認識できた．家庭訪問における対象理解の修得に向けた看護教育方法の研究では，実習環境の整備や授業づくりとともに，領域間の学びをつなぐことが重要であることが示唆されており[8]，学生は，他領域で学んだ社会資源について考えるなど，他領域での実習が影響を及ぼしていた．学生は，家庭訪問後に事例についての振り返りを行い，保健師からの助言を通して，社会資源の活用に関する認識が高まったと考えられる．なお，社会資源の要素として考えられるキーパーソンについては，訪問前のカテゴリーの【家族の特性】，及び訪問後のカテゴリーの【家族のケア】で位置づけて分析しており，ここでは省いた．

2．今後の指導に向けて

家庭訪問実習において対象を理解する際に，対象者や家族が地域で生活し，その生活を支えていくための社会資源の活用の位置づけは大きいと考える．社会資源の量・質は地域格差が大きく，地域を担当する保健師は，実際に活用できる社会資源がどこにあるのか周知しておくことが求められ，社会資源の確保や開発のために，フォーマル，インフォーマルな社会資源の種類・量・特徴に関する情報の蓄積と最新のサービス資源を把握しておくことが必要である[9]．つまり対象者や家族にとっての社会資源の意味が捉えられることで，対象理解が深まることが考えられる．家庭訪問実習で学生に対し社会資源の活用の意義を高めていくことが必要である．

学生は訪問前に，【対象者の特性】【家族の特性】【訪問の必要性】【社会資源の利用】を捉えていた．【社会資源の利用】については，サービスの内容や回数を把握するなど社会資源を理解しようとするに留まっており，対象者や家族の特性と社会資源の活用については結びついていない状況であった．学生が訪問前に，対象者や家族の生活に大きく関わる社会資源の重要性について理解を深めることが望ましい．事前準備としては，その地域の地域診断を行うことで地域の特徴を把握し，社会資源への認識が高まることが期待できる．対象者や家族にとっての社会資源，利用している目的を把握して実習に望むことが重要であり，訪問する事例のエコマップを作成することも有効と考えられる．訪問前のコード「保健師から社会資源についての確認を促された」から，記録からの情報収集の際には，保健師や助言が対象理解に有効であると考えられる．

学生は訪問時に【生活環境】【療養生活】【対象者の思い】【家族のケア】【訪問の意義】【社会資源の活用状況】を捉えており，特に【社会資源の活用状況】については，地域で生活している対象者や家族を支えるため，近所付き合いの重要性やその地域のエンパワーメントの活用を捉え視野が広がっていた．古田らの，家庭訪問実習の学びの内容から，学生は，対象者を個人の存在という捉え方でなく，対象者が，家族や地域社会との関係の中で存在するという側面について理解が深まった[3]と報告していることから，地域に出向き，地域社会で暮らす対象者及び家族と関わることで，対象者個人だけでなく，地域社会で暮らす対象者及び家族の視点を持つことが重要となる．訪問時は，利用している社会資源について，サービス内容や回数だけでなく，「対象者が自分から活用してみようと思う気持ちが重要だと思った」「送迎のある高齢者サロンがあるといいと思った」というコードから対象者の思いを意識して捉えていた．訪問し，対象者や家族の生活環境や療養生活を捉え，対象者の思いを理解し，さらに家族のケアの質や家族のケアへの思いを見極めることが重要である．現在の活用状況も含めて，対象者や家族の思いや考えを尊重し必要な社会資源を提案することは重要な保健師の役割でもある．また，関わる保健師自身が，対象者や家族にとっては社会資源でもある．さらに保健師は，その地域において必要な社会資源の開発を行う役割を担っており，不足している場合は，その地域に合った社会資源を開発し，機能していない場合は，円滑に活用できるように体制を整えていくことが必要である．このことは，個への支援から地域に広がる活動につながっていくと考えられる．学生は，対象者や家族の生活の質を高めることに視点を置き，見通しを立てて必要な社会資源を考える力を養うことが必要である．

学生は訪問後に，【療養生活】【対象者の思い】【家族

へのケア】【訪問の意義】【社会資源の活用の広がり】を捉えており,【社会資源の活用の広がり】については,社会資源の情報を把握しておくことの必要性や導入時の支援の重要性を捉えた.また,対象者だけでなく,家族へのケアとして家族の負担軽減のための視点や社会資源やインフォーマルなサービスや他領域で学んだ社会資源の活用を捉えていた.田村らは,対象者や家族が,地域社会,関係機関や関係職種,生活環境などとうまく付き合えるようにすることが訪問の役割のひとつである[9]と言っており,学生が,地域社会を意識し,その地域で安心して暮らせる体制作りの必要性を認識してもらうことが重要である.

学生の訪問指導の技術を高めるために,実習中に実習指導者と連携し意図的に学びが深められる指導の必要性[3]から学生への意識づけや理解を深めるために実習指導者との連携が重要である.今回,訪問前,訪問後において,保健師の問いかけや助言は,社会資源の活用に関して学生が捉えていた点と点が線でつながり,学生の対象理解に有効であったと考えられる.

地域に住む対象者及び家族の生活を支えていくために,学生が訪問後に捉えていた「一般（民間業者等）の支援」が社会資源として機能していたことからも,地域格差も踏まえ地域特性を理解し,これまでは社会資源としては考えていなかったことが,社会資源となりうる可能性を考えられる視点が重要であり,また不足している社会資源を開発していく力が期待される.

社会資源の活用については,地域において生活している人々への関わりだけではなく,病院や施設に入院や入所している人が地域に戻り生活していく上では重要な視点となる.今回の家庭訪問の実習は,初回の同行訪問の体験であり,対象者の生活状況を理解することで精一杯であったため,「社会資源の活用」の視点に影響を及ぼしていると考えられるが,今後,家庭訪問における対象理解には地域で暮らしている人々の生活を支えている社会資源への認識を高めて,活用の意味や開発への視点について理解を深めていく必要性がある.

Ⅴ. 研究の限界と今後の課題

本研究は,一大学の家庭訪問実習における学生７名のインタビューを分析した結果であり,学生が家庭訪問実習の対象理解として,「社会資源の活用」をすべて明らかにできたとは言い難く限界がある.今後対象である学生の人数を増やし,家庭訪問事例の特性を含めて「社会資源の活用」の対象理解について検討していくことが課題である.

Ⅵ. 結論

保健師課程４年次学生７名を対象として,家庭訪問体験における対象理解について,特に「社会資源の活用」に着目し,訪問前,訪問時,訪問後に区分して分析した.その結果,訪問前は,対象者が現在利用しているサービス内容や回数を把握するなど表面上の捉え方に留まっていた.訪問時には,直接対象者や家族の暮らしぶりを観察し,その人らしさを重視したサービスを考え,社会資源の開発の視点を持つことができた.さらに近所付き合いの重要性について考えるなど,地域のエンパワーメントにつながる捉え方ができ社会資源の活用の視野が拡がった.訪問後には,保健師は社会資源を事前に把握しておくことの重要性を認識し,適切な時期に情報提供する必要性や導入時の支援の重要性に気づいた.対象者や家族にとっての社会資源の活用の意味を考え,視野の拡大につながっていた.訪問前,訪問時,訪問後において,実習指導者の保健師の助言により,学生が捉えていた点と点が線でつながるなど対象理解に有効であった.社会資源の活用について理解を深めることが対象理解につながること．また，そのことを学ぶ上で家庭訪問実習は有効であることがわかった．人々の生活を支える社会資源への認識を高めて,活用や開発の意義についてより理解を深めていけるよう実習指導を検討してく必要があることが示唆された.

謝辞

本研究にあたり,ご協力頂いた学生の皆様，分析の過程においてご協力頂いた共同研究者の方々に深く感謝いたします.

文献

1）津村智惠子,上野昌江:公衆衛生看護学.中央法規,221-223，2013
2）荒賀直子,後閑容子:公衆衛生看護学.インターメディカル，177-180,2015
3）古田加代子,佐久間清美,輿水めぐみら:地域看護学実習における学生の家庭訪問からの学び.愛知県立看護大学紀要 Vol.13,33-40,2007
4）山田淳子,中山かおり,齋藤智子ら:地域看護学実習

における学生の学びからみた家庭訪問実習の効果と課題 :Journal of Japan Academy of Community Health Nursing VoI.11,No1,pp.81-86,2008
5) 金山時恵 , 福岡悦子 : 家庭訪問実習からの学びの分析による実習方法の検討 . 新見公立短期大学紀要 ,29,2, 63-69,2009
6) 看護学大辞典 . 第 5 版 . メヂカルフレンド社 ,2002
7) 在宅看護論　地域療養を支えるケア . 第 5 版 . メディカ出版 .2015
8) 森本千代子 , 眞崎直子 : 家庭訪問による対象理解の修得に向けた看護教育方法の検討 .Japanese Red Cross Hiroshima Coll.Nurs.15 77 ～ 86.2015
9) 荒賀直子 , 後閑容子 : 第 4 版公衆衛生看護学 : インターメディカル, 478,2015
10) 宮﨑美砂子 , 北山三津子 , 春山早苗ら : 第 2 版公衆衛生看護学 : 日本看護協会出版会, 212-214.2017

受付日：2017年10月16日　受諾日：2017年11月18日

【Research Report】

Study of the Understanding by Public Health Nurse Students of People Requiring Care During Home Visits
− Analysis on Utilization of Community Resources −

Toshiko NAKAJIMA　Chisato ICHIHARA　Kenta NAGAI
Kumiko HIRATSUKA　Masako TERUNUMA

Abstract

Semi-structured interviews were conducted of 7 public health nurse students, and data collected before, during, and after home visits were analyzed, to investigate how the nurses learn, across their home visit experiences, about "Utilization of Community Resources" while understanding people who require care, as a part of public health nursing practice. Data, including the changes and trends were analyzed. The results demonstrated that before home visits, students only appeared to learn the contents or the number of services used by the people receiving care; however, after they had the opportunity to visit homes, they were able to consider how much of the community resources were used and learned to view things from the community empowerment and development perspectives. After the home visits, the students recognized that public health nurses need to provide appropriate information at appropriate times and how it is important to support those receiving care when such resources are provided. Moreover, the students also realized how meaningful such resources are for those receiving care and their families, which led to a widening of the perspectives of the students. Advice from public health nurses connected the dots for the students to better understand the people requiring care. This study suggests that the method of education needs to be reviewed for better recognition of the community resources needed to support people's

Key words：public health nurse students, Community Resources, Home Visits, understanding people